

# 日本語学習者のアカデミックスキルについての意識と その変容についての事例研究

徳間晴美 田川恭識

## 1. はじめに

日本の大学への留学生数は依然として増加の傾向が見られ、大学全体に占める留学生の比率は、今後ますます増加していくことが予想される<sup>1</sup>。留学生が日本の大学に留学する目的は様々であるが、留学生に対する大学側の役割は、出来るだけ留学生が実りの多い大学生活を送れるように支援することであると考えられる。

近年、留学生の増加に対応して、英語をはじめとする媒介語を使用して授業を行う大学も増えてきた。しかし、留学生のすべてが英語に堪能であるわけではない。特に、来日留学生の多くを占めるアジアからの留学生の中には、英語が堪能ではない者も少なくない。そのような学生の場合、まず日本語を習得したうえで、大学の入学試験を受け、入学してからは日本語で行われる授業を取る必要がある。しかしながら留学生にとって、日本の大学で専門的な教育を受ける前提となる日本語力を身につけるのは容易なことではない。館岡（2002）では「大学で必要となる日本語力」として「一般的な日本語力」と「アカデミック・スキル」を挙げている。この「アカデミック・スキル」には「資料収集力、分析力、思考力、批判力、発表力、論文記述力」が含まれている。以上のスキルに対して、大学入学前に十分な教育が行われていれば良いが、すべての日本語教育の機関で十全であるとは言いがたい。従って、大学に入学したのち、

授業についていくのが困難になる留学生も少なくない。

アカデミックスキル習得の問題は、留学生に限ったことではなく、日本人学生もまた同様である、という指摘もあるかもしれない。近年では各大学において初年次教育が盛んであるが（山田2008）、留学生の場合、アカデミックスキルの前提となる「一般的な日本語力」も習得段階のケースが多く、その場合、両方の日本語力を並行して習得していく必要がある。日本人の学生と比べると負担が大きいのと言わざるを得ず、負担解消のためには大学入学後も留学生の現状を考慮したアカデミックスキル習得の支援が望まれる。

また大学生活の延長には、大学卒業後に、社会においてどのように自己実現していくかという問題が存在している。学生に対するキャリア教育は初年次教育と同様、各大学において盛んに行われており、留学生もその対象である。しかしながら、留学生の場合、文化も価値観も習慣も、日本人学生とは異なる。そのため仕事や職業に対する意識も、日本人学生とは異なっている可能性もある。留学生に対するより充実した支援を実現するためには、留学生が大学卒業後にどのような自己実現のイメージを持っているのか、ということを知っておくことが有益であると考えられる。

筆者らは、アカデミックスキルおよび「一般的な日本語力」の習得過程にある留学生の日本

1 [http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/documents/data14.pdf](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf)

語科目を担当したことをきっかけに、留学生がアカデミックスキルをどう捉え、何を必要としているのかを知るべきとの考えに至った。また同時に、留学生が抱えている卒業後の目標を把握しておくことで、より学生の目線に立った授業が行えるようになるのではないかと考えた。筆者らが担当した授業の履修者は、ほとんどが大学に入学したばかりの学生であったが、入学当初の時期は、大学における教育や生活に対して戸惑いや不安を感じる時期であると思われる。この時期にある留学生の率直な声を聴き、それを授業内容に取り入れることは、日本語の授業だけでなく大学での生活全般に活かせる日本語力を育成する上で効果的であると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では留学生を対象とし、アカデミックスキルについての意識とその変容、ならびに卒業後に対する意識と変容について知ることを目的とし、アンケート調査とインタビュー調査を実施した。

## 2. 先行研究

前節でも述べたように、留学生が充実した大学生活を送るためには、一般的な日本語力と併せ、大学の授業についていくための日本語力が必要となる。留学生に限らず、多くの学生にとって、大学での授業はそれまでの教育機関における授業とは大きく異なる。日本の場合、中等教育では「知識注入型」の授業が多く、自身で問題や課題を発見しレポートを書く、といった授業活動が行われるのは少ないとされる（山田2009）。一方、大学教育においては、講義以外にも、レポートやゼミでの発表といった課題が頻繁に課される。授業での課題や学習上の問題点を自分の力で解決していくためには、自律的かつ能動的な学習姿勢が必要となるため、その養成を目的として、「初年次教育」が各大学で広く行われるようになった（山田2008）。初年次教育の内容は各教育機関で様々であるが、三宅（2003）では、初年次教育で行われる内容として、大学の授業についていくために必要な知識がない学生、高校までに当該学科の基礎を

学んでいなかった学生を中心に正規カリキュラムとは別に行われる「補習教育」、学業と大学生活を含めた社会生活の両面で充実した生活が過ごせるように支援することを目的とした「導入教育」、また、言語表現力の向上を目指す「言語表現教育」を挙げている。一方、日本語を母語としない学生に対する教育としては、「アカデミックスキル」もしくは「アカデミック・ジャパニーズ」の教育が重視されている。この「アカデミック・ジャパニーズ」の具体的な内容については多様な見方があるが、中でも山口（2013）では「アカデミック・ジャパニーズ」について、「授業を履修する際に必要とされる学習スキルに限定された日本語能力」とし、「具体的なスキルとしては、講義を聴く、ノートを取る、教科書やプリントを読む、資料・文献を調べる、レジュメを作成する、口頭発表をする、レポートを書くといったものがある」としている。また、森（2005）では留学生が大学生活において、どのような日本語力が求められるかを整理したうえで、「アカデミック・ジャパニーズ」を「大学において授業（講義、演習、ゼミ、卒業研究等）をこなし、単位を取得することができる日本語力」と位置付けている。学部に入學した留学生に対し、日本語科目を開講している大学も多いが、山口（2013）をはじめとして、アカデミックスキルの育成を視野に入れた授業の実践も数多く行われている。なお、本研究では、アカデミック・ジャパニーズとアカデミックスキルの違いは考慮せず、「アカデミックスキル」の呼称を用いる。

以上は大学における学習支援の方策に関わることであるが、大学生活の延長線上には、社会においてどのように自己実現をしていくのか、といったことが問題となる。文部科学省は、キャリア教育について「子ども・若者がキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的働きかけ」としている。大学における留学生へのキャリア教育は近年盛んに行われるようになったが、ここでも留学生に固有の問題が存在する。友納（2015）では、日

常生活スキルおよびキャリア発達支援の観点から、中国人留学生を対象としてインタビュー調査を行っている。その結果、キャリア教育の内容そのものの問題の他に、留学生が異文化接触到問題を抱えており、留学生が望むキャリア支援では、「進学就職手続き情報説明会」や「インターンシップ等実践項目」と併せ、「グループ会・交流会」や「人つき合い講座」のニーズが高いことが示されている。友納（2015）の結果は、留学生向けのキャリア教育においては、一般的なキャリア教育の内容と併せ、文化的・社会的な適応を支援する方策も考慮すべきであることを示唆している。

以上の先行研究から、留学生が実りの多い大学生活を送るためには、アカデミックスkills習得支援と併せ留学生固有の問題点に配慮したキャリア教育を実施していくことが望まれるが、実態に即した支援を行うためには留学生の意識の実態を把握しておくことが望ましい。留学生のアカデミックスkillsに対する意識や将来像については、大学生活を送ることで経年的に変容が生じると予想されるが、初期段階での意識と

その変容過程を見ておくことは、アカデミックスkillsならびにキャリア教育の展望を検討するうえで、有益であると考えられる。

以下、3節で調査Ⅰについて、4節で調査Ⅱについて述べた上で、結論を5節でまとめる。

### 3. 調査Ⅰ

#### 3. 1. 調査Ⅰの概要

調査Ⅰでは、筆者らが担当している留学生向け日本語科目の履修者を対象に、質問紙によるアンケート調査を実施した。第一著者と第二著者が担当している科目は異なるが、ほとんどの学習者が両著者の授業を履修していた。調査実施に際しては、2015年前学期中のある授業の終了時に調査の趣旨を説明し、質問紙と併せて調査協力同意書およびフェイスシート（居住歴や日本語学習歴を記入するもの）を配布した。質問紙は全部で3枚であり、18部配布し、7名分（6名：中国出身、1名：東南アジア出身）を回収した。

以下、質問紙の質問項目を表1に示す。

表1 質問紙調査の質問項目

項目番号		質問項目 調査Ⅰ
現在のあなたについて	1	あなたは、どうして日本の大学に入ろうと思いましたか。理由をできるだけ詳しく書いてください。
	2	あなたがK大学を選んだのはどうしてですか。また、どうして今の学部を選びましたか。できるだけ詳しく書いてください。
	3	大学生活では、どのような日本語力が必要だと思いますか。また、それはどうしてですか。
	4	今、あなたはどのような授業を履修していますか。以下の表に1週間の時間割を書いてください。
	5	あなたは、大学の先生や日本人の学生から、あなたの日本語力について、何か言われたことがありますか。
	6	日本語の授業以外で、あなたの日本語力を伸ばすために役立つと思うことはどのようなことですか。
将来のあなたについて	7	あなたは、大学を卒業した後、何がしたいですか。また、それはどうしてですか。
	8	あなたは将来、自分の日本語をどのように活かしたいと思いますか。また、それはどうしてですか。
	9	8で書いたことを実現させるためには、どのような日本語力が必要だと思いますか。また、それはどうしてですか。

### 3. 2. 調査Ⅰの結果

項目1に対する回答では、日本の文化に親しみを持っていたことが留学した理由だと答えた学生が3名、日本で働くことを希望しているためと答えた学生が2名いた。その他、外国（母国以外）での教育を受けることを希望し、高校で日本語を学んでいたため日本へ来たという学生、母国での成績があまりよくなかったため日本の大学を選んだという学生もいた。

項目2については、友人や日本語学校の先生の紹介や勧めと答えた学生が2名、K大学の評判を聞いて、という学生が2名いた。その他、東京に近いという地理的な理由を挙げた学生、他の大学に落ちたから、という学生もいた。

項目3では「書く力」を挙げた学生が3名、「聞く力」が1名、「理解力」が3名、「プレゼンテーション力・コミュニケーション力」を挙げた学生が1名であった。

項目4では、一年生であるため、いわゆる一般教養に分類されるような授業が多く、共通していた科目としては、日本人学生と一緒に受講する初年次教育科目<sup>2</sup>「FYS (First Year Seminar)」が含まれていた。

続く項目5は、「日本語がすごい」、「喋れる、発音がいい」、「結構話せる、漢字をよく知っている」というように、周囲から肯定的な反応を得ている学生がほとんどで、逆に否定的な反応は見られなかった。通常は、面と向かって相手を否定することは憚られるので、これは当然といえども当然かもしれない。

項目6では、日本の映画を見ることを挙げた学生が2名、本を読むことを挙げた学生が2名、日本人と話すことを挙げた学生が2名であった。その他、「ドラマのセリフを言う」とした学生も1名いた。

項目7は、卒業後の進路について問うたものである。「日本で就職したい」と答えた学生は4名であり、その他、帰国するとした学生が2

名であった。日本での就職を望む学生は、理由として「日本で学んだことを社会生活で役立てたい」、「いろいろな経験を身につけたい」を挙げていた。また、帰国予定の学生については、「国に帰って父親の仕事を継ぐ」ことや、「親に恩を返すために（お金を）稼ぐ」といった理由が挙げられている。

項目8では、自分の日本語を将来仕事に活かしたいとする学生が6名であった。実利的な目的に目が向いている学生が多い、と考えてよいだろう。

最後の項目9については、「コミュニケーション能力」や「人と交流する能力」を挙げた学生が2名、「会話の能力と発音、レポート、メールの書き方」を挙げた学生が1名いた。また、「聞く力、理解力」「正確な文法能力」「多くの知識、反応のスピード」を挙げた学生もそれぞれ1名ずつである。理由については、「知識が足りないから」「日本にいるから」といった漠然とした理由を挙げる学生もいたが、中には「敬語と書き言葉が難しい。また、話すときの文法の正確性。相手が理解してくれるように、きれいな発音も大切。」というように、具体的な記述も見られた。

調査Ⅰの結果をまとめると、「現在のあなたについて」は、日本への文化や就職に関心を持って積極的に日本の大学に入学した学生から、消極的な理由で入学した学生まで幅があり、K大学を選んだ理由も同様、自分の将来の展望と結び付けられている学生もいればそうでない学生もいる。大学で必要な日本語力については、「書く力」「聞く力」「理解力」「プレゼンテーション力・コミュニケーション力」が挙げられているものの、その回答内容に具体性はあまり見られないことから、まだ現在の自分の課題は漠然としか捉えられていないことが窺える。そのために、項目6も具体的に記述されていないのではないと思われる。一方の「将来のあなたに

2 新入生（1年次生）全員を対象に、「大学への入門」を少人数のセミナー（演習）形式で行います。入学年度の前期を使って、大学で学ぶための技法と思考力を養成します。「読み、書き、調べ、問題を発見し、自らの考えを発表し討論でき、自らの責任で行動できる」大学生としての資質を身につけます。（大学HPより抜粋）

ついて」は、「現在の自分」と「具体的な就職事情等」すなわち、日本語力を活かして就職（日本あるいは母国）するにあたって必要となる様々な能力とを関連付けて考えたためか、自分がこれからすべき課題が具体的に自覚できていることが窺える。

このように、調査Ⅰの結果からは、日本の大学に入学した留学生が、入学後に大学における授業を履修する中で、「現在の自分の日本語力」と「日本の大学で学ぶにあたって必要とされる日本語力」に隔たりがあること、また、その問題の解決のために漠然とした日本語力の向上の必要性は感じていることが見えてきた。また、日本での就職といった、卒業後の目指すべきところに対しては、ある程度の情報や知識があるため、卒業までにすべき課題を具体的に自覚していることがわかった。

## 4. 調査Ⅱ

### 4. 1. 調査Ⅱの概要

調査Ⅰの結果から、特徴的と思われる学習者4名を対象に、2015年前学期末に半構造化インタビュー（調査Ⅱ）を行った。調査は大学内の空き教室で行い、本人の許可を得てICレコーダーで録音をした。

インタビューでは、調査Ⅰで記入した質問紙を学習者本人と見ながら、アンケート調査時から現時点までの変化の有無を確認しつつ、質問紙に沿って、筆者からの質問に答えてもらった。必ず押さえる項目としては、「なぜ日本語の勉強を始めたのか」、「大学を卒業する時点で、どのような日本語が話せるようになっていたいか」、「大学の授業に対して不安な点は何か」、「大変な授業あるいは役に立つ授業は何か」、「日本人や日本に住んでいる留学生の友人関係はどうか」という点である。

### 4. 2. 調査Ⅱの結果

#### 4. 2. 1. 学習者A

入学後のはじめの学期を終え、「大学での学び方がちょっとずつ分かってきた」という学

習者Aは、入学前、大学での学びに興味を持っていたものの4年間の長さと感じ、大学入学を迷っていたという。通訳の専門学校に通って就職活動もしたが、その際に学歴は大事だと言われたことで大学に入ることにし、将来的には、京都や九州で観光の仕事に就きたいと思っている。専門学校では中国人や台湾人の友達ができ、K大学を紹介してくれたのもそこでの友達だったそうだ。

大学で必要な日本語力については、調査Ⅰで記載していた「プレゼンテーション能力」に対する緊張感が以前より減った一方、「レポートの書き方と情報処理能力」の必要性を感じ始めたという。具体的には、教師が指定した課題について客観的な情報をもとに、自分の考えも含めて分析する力が不十分だと感じており、履修している授業のうち、大変な授業として、「異文化間コミュニケーション」と「経営の基礎」という科目を挙げた。その難しさの要因は、前者の場合は教師の話の内容の難しさや声の小ささにあり、後者の場合は授業内容に自分の興味がないことだと述べた。履修してよかった授業としては、「コンピュータ演習」科目を挙げ、また、日本語科目で語彙が増えてよかったと感じている様子であった。

これまで周囲の日本人大学生から、すべて日本語で授業を受けることに感心されたり、専門学校の先生にも評価された経験を持つ。授業以外で日本語力を伸ばすには「本を読むこと」と「日本人と話すこと」を調査Ⅰで挙げており、前者は専門学校の教師に「世の中は甘くないからたくさん本を読んだ方がいい」と言われたからだという。日本人とはアルバイト先の飲食店で話す機会があるものの、日本人の友達はいないため作りたいとは思っている。学習者Aは、卒業時までには日本人のように話せるようになることを望み、プレゼンテーションがうまくできるようになりたいと考えている。現在は、レポートを書くときの日本語表現などに不安もあるが、将来は日本で学んだことを仕事に活かしたいと考えている。将来的には、通訳の仕事

がしたいが、そのためには貿易や旅行をはじめ、業務を遂行するにあたって様々な知識が必要になると自覚している。

#### 4. 2. 2. 学習者B

日本語を勉強していた姉の影響で日本語を学び始めた学習者Bは、日本のドラマを見て、高校二年生の時に来日を決心した。大学入学前に1年半過ごした北海道の生活は気候的にも大変な面があったことや、神奈川に友人がいたこともあってK大学に進学した。

入学後、サークル内の先輩同士や先生同士の会話を理解するために「コミュニケーション能力」が必要だと感じており、「割り勘」のような日本的な文化を知る必要もあると感じている。履修中の授業では、「経営の基礎」や「異文化論」が難しいと感じている一方、FYS（初年次教育）の授業では発表したり自分の意見を述べたりすることが役に立ったと実感している。大学の教員に対しては、留学生と日本人の学生を同等に扱わず、留学生は日本語力が不足しているため、課題提出などで配慮してほしいという気持ちを抱いている。自身の日本語力については、一度母語で考えてから日本語に翻訳しているため、話す時も書く時も時間がかかり、コミュニケーション能力が十分ではないと感じている。しかし、卒業時には日常会話以上に専門的な単語も話せ、可能であれば、日本で就職したいと思っている。入学前は大学がこれほど大変だとは思っておらず、授業ももっと簡単だと考えていたため、現在は在学中に必要な単位をとり、4年間で卒業できるかが心配だという。友人関係では、他キャンパスではあるが日本人の友達が数人おり、LINE（インターネット電話やテキストチャットの機能を有するソーシャル・ネットワーキング・サービス）で連絡できるため心強く感じている。また、留学生同士でいると、日本語を使う機会が減ると感じるのも事実だと語った。

#### 4. 2. 3. 学習者C

英語がとても苦手で、高校の時から外国語として日本語を選択していた学習者Cは、母国での進学は当初から考えていなかった。その理由は、第一に、母国の専門学校を出ても仕事がないこと、第二に、学歴として専門学校よりいい大学に入りたかったということである。来日後に通っていた日本語学校の先生に勧められ、他大学と比べた結果、K大学に決めた。学部は、数学が苦手ということもあり理学部は選ばず、生活に近くて役に立つだろうことから自身の所属学部を選んだという。

大学生活で必要な日本語力については、「大学では2級が基礎」と考え、JLPT（日本語能力試験）2級に合格しているものの、今では2級の文法でも少しわからないことがあるため復習しているという。今後は、JLPTのためだけではなく、日本での生活で日本語が必要だと痛感したため、勉強したいと思っていると語った。具体的には、「書く力」や「レポート・課題をやる力」「敬語を使う力」が必要だと考えており、敬語に関しては、友達と入ったサークルで、友達の言葉の使い方が原因で先輩と問題が生じたため、「場による」言葉の使い方が重要だと感じたという。

実際に履修している授業で大変だと感じているのは、レポートを書く必要がある「文章表現法」の科目で、日本語学校で作文は書いたことがあるが、レポートは経験がなく、書き方がよくわからないためだという。他には「会計の基礎」で、会計を初めて勉強したため、会計の専門用語が難しく、また、「コンピュータ概論」という科目も、試験を受けた際にいろいろな単語が使われていて全然わからない状態であるという。学習者Aと学習者Bが大変だったと答えた「経営の基礎」科目については、理解しやすい授業だったと述べている。しかし、全体的には入学前に考えていた以上に授業が難しく、それは日本語だけの問題ではないとも考えている。大学で必要だと思う日本語力について、入学前はあまり考えてなかったが、今は発表する時も、ただ読むのではなく説明するのだとわかるよう

になり、少し自信がついてきてはいるという。

友達やチューターからも、LINEでやり取りする時に間違いが多いため、「書く力が弱い」と言われたことがあるが、チューターには、授業の履修の仕方やレポートのチェックなどで助けてもらっているだけでなく、チューターを通して友達が増えていたり、交友関係も広がったりしているようである。

将来については、大学院に入るか日中関係の会社に入ることを考えており、前者は、2020年に日本でオリンピックがあるため、後者は小さい会社を作りたいと思っているためだという。そのためにも、卒業前には、専門についての日本語、人とのコミュニケーション能力、コンピューターでの日本語入力ができる必要があると感じている。

#### 4. 2. 4. 学習者D

日本の漫画をきっかけに日本で暮らしてみたいと思った学習者Dは、実際に来日してみて、想像と少し違ったと感じているという。それは、日本人は少し冷たいと聞いていたが、日本に来てみたら皆とても親切で優しく、大学の友達はほとんど日本人で、今は英語のクラスの人たちで仲良くしているからだという。FYS（初年次教育）をきっかけに掲示板を通して仲良くなった友達もおり、ブラジル人の先輩が自分と同じ国の人を紹介してくれるなど、友達の輪が広がっているようである。

K大学には、入学前のアルバイトでK大学の経営学部がいたため、直接いろいろ聞くことができ、将来、起業したいという考えもあって、経営学部を決めた。入学前に考えていた、大学で必要な日本語力については、「レポートの書き方」と「理解力」と回答（調査Ⅰ）していたが、今は、「専門用語の理解」と「発表の力」も必要だと感じるようになっていく。1学期間を過ぎてみて、自身の会話力が伸び、レポートの書き方も勉強になったと感じている。一方、前学期の学期末試験をどのように乗り越えるかが不安で、ゼミも怖いと感じている。「文章表

現法」や日本語科目は履修してよかったと感じている一方、「会計の基礎」や、「異文化間コミュニケーション」、「キャリア形成論」は大変だと感じている。

将来については、帰国して、日本と取引している父の貿易会社を手伝いたいが、最近は大学院への進学も考え始めている。日本に来てからいろいろ勉強になり、日本語も上達が速かったため、自立して、またアメリカなどの大学院で勉強したいと思うようになったということだ。日本語学校の時とは違って今は何でも自分でやらなければいけないと感じていると言い、自立心が養われたようである。

仕事については、インターンシップに参加して日本の企業の様子を見れば、いろいろ勉強になると思うし、また、物を売る時に国際的な様々な手続きが必要となるため、さらに勉強したいと感じている。現在は、「レポートとメールを書く力（敬語使用）」が足りないという自覚もあるが、卒業前には専門知識を今より身につけ、ビジネス上の取引先との会話やメールなどにも対応できるよう備えておきたいと考えている。日本語力を伸ばすためには「日本人の友達と話すこと」や「本を読むこと」が必要だと回答していたが、その後、日本の伝統的なことなどいろいろな話を聞いて、日本のことをもっと知りたいと感じている。

#### 4. 3. 調査Ⅱの考察

4.2.で記述した学習者のインタビュー結果から、大学入学後の最初の学期末を迎え、単位取得に対する懸念が生じている様子が共通して窺える。大学での授業に関しては、入学前の考え以上に内容理解で苦戦している科目がそれぞれに出てきているようである。このことが、「大学で必要な日本語力」に対する認識を具体化させたのだと考えられる。

また、大学生活において重要となる交友関係については、その広がり方の個人差が大きい様子がわかった。特に留学生という立場で大学生活を送っていくにあたっては、大学生としては

対等でありながらも、時にはサポートをしてくれる日本人学生の存在の有無は日々の大学生活を大きく変えるであろう。K大学では、留学生に対し、入学後の最初の学期に個人チューターをつけるシステムがあり、履修方法等に個人的に相談できる相手がいる。このシステムは、日本の大学生活に馴染むにあたって個々の事情に応じて支援してくれるという点で、非常に重要であろう。現実的には、チューターとの相性や個人的な要因などは当然あると思われるが、最初の学期を終えてからも、日本人学生と留学生の交流の場が継続的に保持されることを期待したい。

大学入学後、留学生は様々な面で周囲からの支援を受ける立場にある。しかし、留学生はいっまでも「助けてもらう」立場にいるのではなく、徐々に大学生として日本人学生と対等な立場で自己表現できるよう、自立していけることを目指す必要があることを忘れてはならない。

## 5. 結論

本事例研究では、日本の大学に入学したばかりの留学生が、大学生活に必要な日本語力を習得するにあたってどのような意識の変容があるか、またそこから見える課題は何かを考えることを目的とした。

まず、調査結果から見てきた留学生特有の問題に対応するには、「留学生向けの初年次教育の必要性」が指摘できよう。K大学のように、日本人学生と同じ初年次教育を受けることは有益であるが、「一般的な日本語力」が十分でないために、専門科目の内容理解に当たっては語彙力やノートテイキングの方法、聴解力といった情報を得る過程での躓きが少なくないことが窺えたためである。例えばノートをとるという行為は、インプットされた音声を音素に変換後、文字列化し、それに対応する語を選択したうえで、文字として記述する行為であり、日本語母

語話者の場合は一連の過程で躓くことは少ない。しかしながら、学習者Bのように、日本語のアウトプットにあたり、まず母語の表現を考えてから日本語へ訳すという行為は、「自動化」ができてない段階であることを示唆しており、他の留学生も同様に、認知的な負荷が高いことを痛感している様子が調査結果からみることができた。留学生自身が、日本語力が足りないことを前提とし、授業中の課題提出について担当教員に配慮してほしいとまで望んでいたのである。しかし、それは現実的ではないと言えよう。留学生を受け入れる側の大学は、入学前の日本語の予備教育にあらかじめ期待している部分があるかもしれない。しかし、日本語学校の日本語教育が試験対策に偏重しているきらいがあるため、大学入学前の事前教育に大きな期待をするのは無理がある。

よって、筆者らは、留学生向け<sup>3</sup>の初年次教育が必修科目として必要なのではないかと考える。2015年度後学期、筆者が担当した「プレゼンテーションの聴解や実践」を扱った授業では、本調査で対象とした留学生が継続して履修したが、「一般的な日本語力」と「アカデミック・スキル」の双方において課題が顕著に見られたことから、その必要性は明らかである。

また、留学生の卒業後の自己実現との関連では、その必要条件である「卒業のための単位取得」に対し、入学後の不安が次第に膨らんでいることに着目すべきである。その背景には、入学前の認識、つまり日本の大学で留学生として学ぶにあたって備えておくべき能力を十分に理解していなかったことがあろう。ただし一方で、個々の弱点からくる課題が具体的に見えてきたことで、今何をしなければならぬかという点が明確化したことには大きな意味がある。「入学前の認識」については大学が即対策を打つのは難しいかもしれない。しかし、今後増えることが予想される留学生に対して、キャリア教育

3 K大学では学習支援室が存在している。しかし、基本的には学生の相談に乗るところであるため、自主的に来室しないと支援が受けられない体制になっている。

という視点を取り入れて大学が教育を行うことは、求められ続けるであろう。

## 6. 今後の課題

本研究は、筆者らが担当した授業の履修者を対象とした事例研究であるため、質的なデータをもとに考察を行った。「短期留学」という形ではなく、四年間、日本の大学で学び続ける留学生について、授業実践を通して抱いた問題意識に基づいて調査を行った。大学に入学したばかりの留学生がどのような状態にあるのか、今回捉えられた現状を、今後の授業実践に活かしていきたいと考える。

調査対象者の数からも、事例の域を超えることはなく、限定的な結果しか得られていないが、今後は調査対象者の増加、もしくは縦断的な調査も視野に含め、研究を続けていきたいと考える。

## 参考文献

- 館岡洋子 (2002) 「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律的学習」『東海大学紀要留学生センター』22, 東海大学, 1-20.
- 友納艶花 (2015) 「中国人留学生の日常生活スキルの検討及びキャリア発達支援に関する研究」『九州女子大学紀要』第51巻2号, 九州女子大学, 1-11.
- 三宅和子 (2003). 「留学生・日本人大学生のアカデミック・ジャパニーズとは」, 『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ 日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究—国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに—』, 平成 14-16 年度科 88 学研究費補助金基盤研究費 (A) (1) 中間報告書, 104-105.
- 森朋子 (2005) 「大学教育における「アカデミック・ジャパニーズ」を考える」『東京家政学院大学紀要』第45号, 117-122.
- 山口和代 (2013) 「アカデミック・ジャパニーズの養成を目指した授業実践：総合政策学部「日本語Ⅱ（総合）」」『南山大学国際教育センター紀要』13, 南山大学国際教育センター, 53-64.
- 山田礼子 (2008) 「初年次教育の歴史と理論」『大学と学生』第54号, 日本学生支援機構編, 16-23.
- 山田礼子 (2009) 「大学における初年次教育の展開-アメリカと日本」Journal of Quality Education Vol. 2, 国際教育学会, 157-174.